

文章題テスト・小説(4)

日 月 名前

★つぎの文しようを読んで、あとの問いに答えましよう。

ある山の中に、おもしろいキツネがすんでいました。いつも、ひとり歩くことがすきでしたが、ある雨の日、いつものようにえさをあさってぼつぼつ歩いていきますと、男の子が四、五人、がやがや話しながら山を下っていました。

人間は二本の足で立って歩いているので、キツネはめずらしくてしかたがないのです。キツネのおかあさんは、「人間のところへ行くどひどいめにあうから、人間のところへせたいに近づいてはいけませんよ。」と、いつもいうのですけれど、キツネは、人間のすがたがおかしくてしかたがなかったのです。なによりも、ひよろひよると、立って歩いているのがおかしくておかしくてしかたがないのです。キツネは、子どもたちのうしろから①ついて行きました。

「このへんはキツネのであるとところだぞ。」

一人の子どもがいました。

「昼間から出ることはいいだらう。」

また一人の子どもがいました。

「昼間でも雨がふっているから出るかもしれません。」

また、もう一人の子どもがいました。

時々、とおくでかみなりが鳴っています。

子どもたちは、何となくきみがわるくなったのでしよう、歩いていた子どもたちは、ふっと足をとめて耳をそばだてました。すると、一人の子どもがふいに後ろをふりかえって、キツネをみました。

「あッ、キツネが出おったぞッ。」

子どもたちはびっくりして、まるで豆がはじけたようなすすまじいきおいで、走って山を下りはじめました。

キツネもびっくりしました。どうしてあんなに子どもたちがさつと走って行ったのだらうと思いました。雨のふるなかを、キツネもぬれながら、子どもたちの後をおいかけてゆきました。

細い山道をいくまがりもして、②、人間の通るらしい道の近くへきますと、山の田んぼぞいのところ、大きい牛がもうもうとないていました。

(注) いくまがりもして…何回もまがって

(林 芙美子「狐物語」による。一部変更)



1 線1「人間のところへ近づきたいに近づいてはいけません」とありますが、キツネのおかあさんは、人間に近づくとどうなると思ったのですか。文中から七字で書きぬきましましょう。

と思った。

2 線2「キツネは、人間のすがたがおかしくてしかたがなかった」とありますが、人間のどのようなすがたがいちばんおかしかったのですか。文中から八字で書きぬきましましょう。

すがた

3 ①、②に当てはまることばを、ア〜エからそれぞれえらんで、記号を書きましましょう。

①
②

ア さっと イ そっと ウ もっと エ やっと

4 線3「きみがわるくなった」とは、「こわいかんじがした」といういみですが、そのりゆうとしてあてはまらないものを、ア〜ウからえらんで、記号に○をつけましましょう。
 ア キツネが出るかもしれないと思ったから。
 イ 後ろからキツネの足音がきこえたから。
 ウ とおくでかみなりが鳴っていたから。

5 線4「あッ、キツネが出おったぞッ。」とありますが、このことばは、どのように読むのがもっともふさわしいですか。ア〜ウからえらんで、記号に○をつけましましょう。
 ア うれしそうに、明るい声で
 イ ゆっくりと、しずかな声で
 ウ おどろいたように、大きな声で

6 つぎの二つの文が同じようないみになるように、□に当てはまることばを考えて書きましましょう。

・キツネは、子どもたちを おいかけた。

・子どもたちは、キツネに

